防衛大学校本科第２６期学生及び理工学研究科第１９期学生卒業式における学校長式辞（昭和５７年３月２２日）

第4代学校長　土田　國保

防衛大学校本科第２６期及び理工学研究科第１９期の学生諸君は、本日をもって所定の教育訓練並びに研究の全課程を終了し、４年あるいは２年の小原台生活に別れを告げることになりました。ここに卒業式を挙行するに当たり、卒業生諸君全員に対し、まず心からお祝いを申し上げます。

本日のこの栄ある式典に、国務御多端の折柄、御臨席を賜りました鈴木内閣総理大臣[注(1)]、伊藤防衛庁長官[注(2)]をはじめ、国会議員の諸先生ほか内外多数の来賓各位に対し、心から厚くお礼を申し上げます。また卒業に至るまでの間、歴代の防衛関係機関の幹部各位、官民の諸機関、更には有志の皆様方並びに在日米軍、各国大使館付武官の方々からいただきました御指導、御協力に対しましても、併せて厚くお礼を申し上げる次第であります。また、本校において学術教育の任に当たられました教授、助教授、講師、助手の各教官をはじめ、日夜をわかたずひたむきに訓練補導に全力を傾注され、あるいはまた、縁の下の力持ちとなって各般の校務に精励せられた自衛官及び職員各位に対しましても、学校長として、この際改めて深甚なる感謝と敬意を表するものであります。更にはまた、遠路をも省みず御参列賜りました御父兄の皆様方に対しましても、その御援助に深く感謝するところでありまして、ここに御子弟の成業を心からお祝い申し上げる次第であります。

５０８名の本科卒業生諸君、省みれば昭和５３年の秋、私が本校に着任いたしました時、諸君はまだ紅顔可憐なる１年生としてその前期を終えたばかりでありました。あれから３年有半、諸君は一回りも二回りも

注(1)　鈴木善幸

注(2)　伊藤宗一郎

大きく、強く、逞しく育ってくれました。いよいよこれから、陸・海・空の一般幹部候補生として、来るべき２１世紀における日本の国運を担う若人の一人として、元気一杯羽ばたいて行かれるよう心から祈念するものであります。

シンガポール共和国、タイ王国の４人の卒業生の諸君も、今後一層の御健闘をと願っております。

かねてから私は、諸君に対して防大生はどうあるべきかを説いてまいりました。

すなわち防大生こそは、他の大学生にひけを取らない学力、体力、適応力を備えながらも、その根性の基本においては、この尊い祖国日本をいかに守るかを念頭に置き、そのため自らの心身を捧げる愚直な男、反面、いざとなれば何でも出来る男、国際人として、情報マンとして、科学技術を駆使し、縦横に機略を発揮し得る男、２１世紀における日本の本当の侍、本当の紳士はそれこそ防大で養成されるべきである、というのでありました。

卒業を迎えた現在、以上申し述べたような防大生像を尺度として諸君に当てはめて見る時、諸君一人一人が、すでに大きく完成された人間であるかと申せば決してそうではありません。防大教育が小さな完成品を作るのではなく、むしろ将来伸びてゆくポテンシャルを秘めた大きな未完成品をつくることにある以上、それは当然のことなのであります。すなわち諸君の人間修行も、学問の研鑽も、すべてこれからが本番であり、前述した「 防大生像 」が実るか否かもまさにこれからなのであります。卒業こそスタートにほかなりません。しかも、今後の陸・海・空幹部候補生学校における専門的職能教育、そしてその後に引き続く各種実務研修の課程はもとより、いよいよこれからは、諸君一人一人の心掛けによって実りある研鑽錬磨をつみ重ねてゆくべきであります。

特に忘れてならないことは、学問に対する尊敬の念であります。学問の道は遠く深いのであります。どうか将来とも、機会あるごとに研学の門をたたき、あるいは自己研鑽に努められ、もって２１世紀における自衛隊幹部に要請されるところの、豊かな国際的視野と優れた科学技術力の担い手として、自らを築きあげていただきたいのであります。

次に６０名の理工学研究科卒業生諸君に対し一言申し述べます。この貴重な２年の歳月、諸君は防大本科、あるいは一般大学で受けられた学業の上に更に磨きを重ねられ、高度の専門的知識技能を身につけらたのであります。一昨年に引き続き、昨年１２月、防衛庁における諸君の研

究発表会が重ねて成功裡に終わったのも、まさに諸君の日ごろの研鑽努力の賜であり、心から敬意を表するものであります。

今後、諸君はそれぞれ新任務に挺身されるわけでありますが、我が国の防衛に関する技術の充実強化がますます重要な課題となっております今日、どうか今後とも、更に研鑽に努められ、自衛隊の科学技術の発展向上に尽力されんことを切望するものであります。

さて卒業生諸君、汗と涙の思い出の小原台生活の幕は今まさに閉じんとしつつあります。これから先、同期生としての融和団結を更に強め、将来いかなる部署、そしていかなる境涯にあっても、防大出身者としての誇りをもって、お互いに手を取り合い助け合いつつ、祖国日本の輝かしい将来のために挺身してゆかれんことを、お別れに当たり心から祈念してやみません。

重ねて諸君の健康と健闘を祈りつつ、ここに式辞を終わるものであります。